

# 道助法親王家五十首

光台院五十首

江蛩

白つゆの玉江のあしのよひよひに

秋風ちかくゆくほたるかな

難波江やあしのはがくれすむものを

小やもあらはにとぶ蛩かな

夏むしのおのれはやみにあらねども

まよふ入江は月もやどらず

こぎかへるたななし小舟同じ江に  
もえて蛍のしるべがほなる

難波めがすくもたく火のふかき江に  
うへにもえてもゆくほたるかな

なには江や海士のいさりか蛍かも  
あしのほのかに秋かぜぞふく

伊勢のうみの入江の草の塩干がた  
あまも蛍の玉はひろはじ

ゆく蛭たま江のあしのうら風に

かりそめならぬあきをつぐらむ

難波えやみいるうづめはあまにいさりいい火の

影ほのかにもゆくほたるかな

難波えやからぬあし火をたき初めて

波のよるをもしる蛭かな

暮行けば蛭とびかふみしま江の

玉江のまこもしばしからすな

難波がたもゆる蛭も同じえに

煙ぞあらぬあまのいさり火

なにはえのあしまの蛭もえてのみ

こやあらはなる思ひいなるらん

夏と秋とたれかはわきてみづのえに

かたへすずすくゆくほたるかな

つらきえに乱れそめにし夏虫の

玉散るばかりものおもふらむ

堀江こぐ御舟ふりにし浪のうへに

猶たましくはほたるなりけり

難波江やさのみはともす海士もあらじ

螢やけぶる漁火の影

かがりさすたななし小舟漕ぎかへり

入江のほたる数ぞしひ行く

大井河くだすう舟のかがり火に

入江のほたるかずまさるらん

ふかき江の思ひよいかに夏むしの  
とくどしらたま哀とやみむ

身よりあまる思ひはたれも難波なる  
ふかきえにしもとぶ蚩かな

暮れやらぬあしのはがくれとぶ蚩  
入江のみづやよをいそぐらむ